

通史：半世紀のあゆみ
青春のパライストラ
 創部50周年にむけて

編 集 部

1. 平成7年（1995）・多難な年明け

風俗・流行・歌 オウム世代・戦後50年
 目／PHS全国展開に／♪『HELLO』

平成7年度は当初から多難な年明けだった。その様子を清谷利次OB会長が、平成6年度「OB会誌」の巻頭言に克明に記している。



平成6年度の諸行事にご協力とご支援を賜り厚くお礼申し上げます。近年日本をとりまく諸情勢は人災と天災により大不況、大不安、大混迷の真っ只中にあり、世の中は混沌とした落ち着きのない時代であります。しかし諸兄におかれましては、これらに影響されることなく、ご活躍のことと存じます。

さて、はじめに、阪神淡路大震災（平成7年1月17日未明）で被災されました諸兄並びに家族の皆様方に心からお見舞い申し上げます。災害からの辛苦を乗り越えられ一日も早いご回復をお祈り申し上げます。

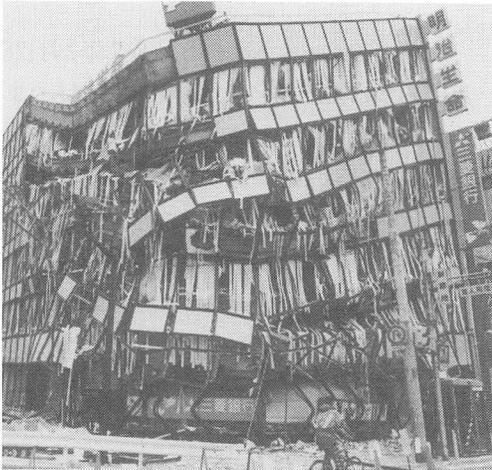
次に、当会におきましては、平成7年2月12日、思いがけない松井清名誉会長のご逝去がありました。私どもにとりましては誠に痛恨事であり、言しようのない哀しみであります。これまで（松井）先輩が関西大学レスリング部に残されました数々のご功績と愛情の偉大さは永遠に私どもの脳裏から消え去ることはありません。我々は先輩の遺志を継ぎ「部」の発展のために全力を尽くすことがご恩に報いる道だと信じております。我々の素晴らしい指導者であり、恩人でありました大先輩のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

またいつものことではありますが、2部の下位に大低迷する現役の復活強化の件があります。その強化のためにはスポーツ推薦入学の全面復活が待望されております。早急なる大学側のご理解ある対応を熱望している次第であります。その一方で、現役の一層の発奮を促していくために、合宿訪問、リーグ戦の応援などを通じて、現役との絆をより強くして、その奮起を仕掛けていきたい所存であります。この点のご理解とご協力を切にお願い申し上げます。（清谷利次手記「OB会誌」）



平成6年度（1994）の大島鎌吉スポーツ文化賞

贈呈式は、阪神淡路大震災のために、その延期（不開催）が決定された。その大震災と松井名誉会長のご逝去と、そして「オウム事件」と、次々に予測できない大事件が頻発した年であった。そうしたなか、西日本学生リーグ戦が始まって以来のライバル校「関西学院大学レスリング部」が、平成7年4月22日に、創部50周年記念式典を開催している。その会場「大阪倶楽部」には、関西大学レスリング部OB会から、清谷会長、西脇副会長、柏木幹事長が代表で出席している。当然のこととして、関西大学レスリング部の、「創部50周年」も話題に採り上げられることになる。



写真▷平成7年1月17日の「阪神・淡路大震災」

しかし創部50周年を間近に控える関西大学レスリング部の現況は振るわない。深刻ですらある。天津敏郎主将（4年）、芳里哲也副将（4年）、小寺斉人主務（4年）、3回生は0名、2回生に3名がいたものの2名が4回生になるまでに退部、1回生に副務を務める飯田友子と紅一点の女子レスラー岸本裕子、それにこれもやがて1名のみの男子レスラーとなってしまう甲斐晶という陣容である。部員が集まらない。折角の入部者が退部してしまう。そんな状態が毎年続く。

創部50周年を目前にする我が関大レスリン部は、この春2部5位で、秋もまた同順位だった。しかしながら現役は低迷を続けるものの、OB会にとっては、慶事があった。

- ▷ 名誉会長の宇賀照夫氏（S28年卒・株式会社大阪防水社代表取締役社長）が、産業の振興と発展に尽くされたご功績によりまして、春の黄綬褒章の栄に浴されました。（清谷利次手記）
- ▷ 秋の叙勲では、顧問の村田恒太郎氏（初代監督・日本レスリング協会最高顧問）が斯界に尽くされたご功績によりまして、勲五等雙光旭日章を受賞されました。（清谷利次手記）

手記は平成7年度「OB会誌」の巻頭言からの引用なので、その執筆時期は、平成8年に入ってからとなっている。そこには、「50周年」を迎える清谷OB会長の「念願」が書かれている。



さて、来年（平成9年）には創部50年目を迎え、当レスリング部の活動が半世紀にわたって引き継がれることとなります。OB・現役ごぞってこの節目をお祝いしたいと念願いたしております。諸兄のより一層のご指導とお力添えをお願い申し上げます。（清谷利次手記）

2. 平成8年（1996）・横山監督発進

風俗・流行・歌 オヤジ狩り・人前キッス／ルーズソックス／♪『アジアの純真』

関西大学レスリング部が創始されてから50年目を迎えようとしている平成8年（1996）に、史上

2回目の「4回生皆無」の陣容で臨まざるをえなかった。その年に、横山博行（S56年卒）が第7代目の監督に就任している。藤田前監督が家業の関係で勇退したのを受けてのことである。本書の「監督回顧録」に、就任後間もない横山は、「冬来たりなば……」とその心境を綴っている。関大レスリングの黄金時代は「3期」あった。そして、大学紛争を経てその後遺症の時期を「第1期危機存亡の時代」と謂うならば、まさに「第2期危機存亡の時代」と表現しうる事態に至っていた。横山博行は、関西大学法学部を卒業すると同時に、関西大学事務職員として勤務することになった。仕事の事情が許せば、彼ほど、この時期に適当な人事はない。しかも藤田監督と2人3脚で、「一進一退」の苦難の道を、こつこつと歩んできたからには、すべての経営のコツを心得ている。だが、道は厳しい。横山は覚悟の監督就任受諾の決意表明を、「レスリングが格闘技であるかぎり、努力のスポーツであるという事実は変わらない。このことを忘れないかぎり、関西大学レスリング部の春は遠からじ……」と語っている。

さて創部50周年行事に関わるいわゆる事業計画と、平成8年度の経緯については、つぶさに平成8年度「OB会誌」巻頭言に記録されているので、そのまま引用しておきたい。



平成8年、会員諸兄には長期の経済低成長期のなかで懸命に努力されていることと存じます。平素は、現役のご指導とご支援、また、本会への多方面にわたるご協力とご支援を賜り厚くお礼申し上げます。お蔭さまで「会」の目的にそって地道な活動を続けることができましたことを感謝いたしております。

さて、昨年6月の総会において議決されました創部50周年記念式典は、来る、11月24日、大阪厚生年金会館にて挙行することになっております。

議決後、役員会、実行運営委員会などで協議を重ね、昨年末より各担当委員会において具体的に推進いたしております。まず役員、次に有志有力諸兄をお願いしてまいりましたところ、厳しい経済状況ながらも、主旨をご理解していただき、すでに多額のご浄財のご寄付を頂戴し、(基金調達は)目標額に向かって順調に進んでおりますことをご報告いたします。なお、後日、会員各位に「50周年記念事業実施資金の募金について」の表題で書面を送付させていただきますので、主旨ご賢察のうえ、できる範囲にてご寄付を賜りますようお願い申し上げます。

この50年にわたる「マット上の歴史」はそれぞれ年代が支え、綴り、継承してきましたが、OBと現役とは「親子」以上の年齢差がみられ、長き年月でありました。記念式典当日には全会員が一堂に会して、「過去・現在を」、「自分たちの目と耳で」、「そして心で結ばれた青春時代に回帰し」、また現今を語りあえる貴重な機会でもあります。OB各位、現役ともども、お誘い合わせいただいて是非ともご出席くださるようお願い申し上げます。このほか「50周年記念史」の発刊を決めております。編集委員会では、日夜編集に向け努力していただいております。有り難く感謝しております。すでに昨年には各位に「一言録」の寄稿をお願いいたしました。今後も原稿、写真などの依頼文がお手元に届きましたら積極的にご協力賜りますようお願いいたします。

ところで、現役につきましては、万年部員不足に悩まされ、2部下位の低迷からの脱出は残念ながら先が見えない状況にあります。この冬の時代が続くなか、昨年まで監督として指導してこられた藤田裕充氏は一身上の都合により勇退されました。同氏の長年にわたってのご指導に対して心より感謝の意を表します。ご苦労さまでした。なお後任の監督として、横山博行氏が就任されました。

若さ、センス、指導力ともに抜群の方であり、大いに期待しております。OB会も支援して行く所存です……。 (清谷利次手記「OB会誌」)

◇

この春、関大は、2部リーグ第5位だった。秋もまた第6位にとどまった。



写真▷平成8年の「頑張ってます」
中央＝横山監督・その右＝安田コーチ

3. 平成9年(1997)・創部50周年

風俗・流行・歌 日本版ビッグバン／た
まごっち／♪『CAN YOU CELEBRATE?』

関西大学レスリング部は昭和23年(1948)に創部されてから、この年平成9年(1997)で、半世紀を数えることになった。その間には、さまざまなことがあった。すべてにわたって共通していることは、いつの時代にも、黄金時代であっても、危機の時代であっても、そのときどきの関大健児たちが、「ああ!レスリングをできてよかった!」の感慨を抱いてきたことではなかったか。

ところで関西大学レスリング部は、1997年5月17日、18日の両日に大阪府立体育会館で開催された、1997年度春季リーグ戦において、2部リーグ最下位という、史上最悪の結果を記録することになってしまった。それも8戦全敗だった。総監督の伴義孝、監督の横山博行、コーチの安田忠典の指導陣は、無言で、唇を噛みしめていた。その結果に対して一言の弁明も発することはなかった。事態はそれほど深刻であったからだ。部員不足のおりから7名のみで8階級を戦ったのだが、そのうち1名は助っ人に借りだしてきた選手である。さらに不運にも大半のレスラーが負傷していた。年度当初のレスリング部実員数の内訳は4回生1名、3回生3名(内1名の女子主務と1名の女子レスラーを含む)、2回生4名、1回生0名の合計8名であった。2部といえども大半の他大学は「スポーツ推薦入学制度」で陣容を強化している。実力の差異は明白である。ここでは事実のみを記しておきたい。

秋がきた。1997年11月22日、23日の両日、大阪府立体育会館で、汚名挽回を図らなければならない、秋季リーグ戦を闘った。結果は2部5位に浮上した。健闘だったといってよい。春と比べれば、部員が2名減っていた。1名のみ4回生と2回生のうち1名が春季リーグ戦後に退部したからである。その経緯に指導陣は困惑したのだけれども、退部者を、敢えてとどまるようにと説得することはしなかった。苦境にドタバタしてはじまらない、その気概を残る部員にもってもらいたかったからである。残ったのは、その後に入部した1回生1名と、2回生3名、3回生1名の合計5名の男子レスラーと2名の女子部員となってしまった。シーズン途中で4回生不在のチームにまたもやなってしまった。だが残る数少ない部員たちには、「気概」が育ちつつあった。合言葉は「11月24日」「創部50周年記念式典」だった。なんとか

しなければならぬ。部員たちは、助っ人選手の調達に腐心した。そして秋には、「柔道部」から借りだした選手を揃えて、「2部5位」をとりあえず確保することになった。そして翌日11月24日午前10時、3回生新主将の甲斐晶と、3回生新副将の岸本裕子と、3回生主務の飯田友子と、2回生の立澤豪と、2回生の吉井章浩と、2回生の森脇功次と、1回生の田和良介との全部員7名が、晴れやかな顔だちで、記念式典会場の大阪厚生年金会館に姿を見せてくれた。指導陣には「晴れやかな顔だち」に見えたのである。彼らが何とか繋いでくれるだろう、この半世紀の「架橋」を、21世紀へと。そのように確信がもてる「顔だち」だった。



写真▷創部50周年記念式典の1コマ

第1部 記念式典

午後2時、記念式典は、総司会の森川泰治（S34年卒）のリードで開会した。式次第は次のとおりである。なお、主賓の日本レスリング協会会長・笹原正三氏は、長野冬季五輪の「選手村村長」の要職を務めることになっており、当日はその会議出席のために急遽出席することができなくなって、同協会の沼尻直副会長が代理として出席して

くれることになった。

- ▷ 開式の辞 横山 勝利（関西大学レスリング部OB会副会長）
- ▷ 学歌斉唱
- ▷ 黙 禱
- ▷ 式 辞 清谷 利次（関西大学レスリング部OB会会長）
- ▷ 来賓祝辞 横山ノック（大阪府知事）
- ▷ 来賓祝辞 笹原 正三（日本レスリング協会会長）
- ▷ 来賓祝辞 森本靖一郎（学校法人関西大学常務理事）
- ▷ 来賓祝辞 寺西 武（関西大学校友会会長）
- ▷ 功労者表彰
- ▷ 謝 辞 高堂 俊彌（関西大学レスリング部部長）
- ▷ 閉会の辞 西脇 義隆（関西大学レスリング部OB会副会長）

第2部 祝賀会

- ▷ 開宴のことば 松浪 啓一（関西大学レスリング部OB会副会長）
- ▷ 来賓挨拶 松原 正之（全日本学生レスリング連盟会長）
- ▷ 来賓挨拶 福本 昌三（関西大学体育OB会会長）
- ▷ 乾 杯 岩野 悦真（西日本学生レスリング連盟会長）
- ▷ 祝 唄 初音家康乗「河内音頭」
- ▷ 逍遙歌
- ▷ 万歳三唱 押立 吉男（大阪府レスリング協会会長）
- ▷ 閉会のことば 柏木 貞夫（関西大学レスリング部OB会幹事長）

祝賀会で「閉会のことば」を述べた柏木貞夫（S33年卒・OB会幹事長）が、関西大学校友会新聞『関大』（平成10年1月1日号）に、当日の記念集合写真とともに、この記念式典の報告記事を発表しているのだから、ここに紹介しておきたい。

◇

関西大学体育会レスリング部創部50周年記念式典・祝賀会が同部OB会（清谷利次会長）の主催で、11月24日午後2時から大阪厚生年金会館で関係者220余人が出席して開催された。

来賓に諸団体から横山ノック大阪府知事、笹原正三日本レスリング協会会長、松原正之全日本学生レスリング連盟会長、岩野悦真西日本学生レスリング連盟会長、また本学関係から森本靖一郎常務理事、寺西武校友会会長、福本昌三体育OB会会長を代表として迎え、関大レスリング部の「50年の歩み」に対して過分な祝詞を賜った。

関大レスリング部は、昭和23年に設立され戦後の荒廃期にあってその当初から斯界のリーダーシップを担い、爾来西日本学生リーグ戦27回優勝という未曾有の金字塔を打ち立ててきた。また東京五輪金メダリストの市口政光氏を筆頭に国内外で活躍する名選手を多数輩出している。だが現在は、大学紛争後の諸般の事情のために不本意ながらも低迷している。

祝賀会では各界代表から再生「関大レスリング」に向けての激励と期待の声が寄せられたのに対して、高堂俊彌レスリング部顧問先生をはじめ関係者一同から、「現役」と「OB会」が一丸となって斯界の発展と関大復活のために一意専心する決意が述べられた。（柏木貞夫）

◇

ここに「祝唄」がある。1997年11月24日の関西大学レスリング部創部50周年祝賀会に際して、初音家康乗が、創作したものである。河内音頭にのって唄えば、関大レスリング部の「50年」が、走馬

灯のように想起されてくるだろう。

◇

◎ 頃は昭和二十三年
○ 焦土と化した大阪で
産声上げたこのクラブ
明日への希望に胸はずませた
若者が

アン

三度の食事もままならぬ
学生の本文学業に
うち込むことすらむずかしい

ウレイ

そんなきびしいアア世の中で
まともな用具も無いときに
芝生の上や古畳
体（からだ）じゅうが傷だらけ
練習に励む関大健児
「もう顔や体にすり傷、切り傷に
赤ちんぬって、まるで赤鬼が暴れてるよう
やった」
そうでございます。

サ

俺もお前も赤鬼か
冗談言うたその顔に
浮かぶ笑顔がすばらしい

◎ 昭和二十と四年には
関西学生リーグに加盟して
春季リーグに初出場

○ 並いる強豪打ち倒し
アン

見事果たした初優勝

サ

それから続く栄光は
リーグ戦での優勝が
何と二十と七回

全日本選手権
全日本学生選手権
入賞、優勝数知れず
アン
ついに世界へはばいた

サ
ユニバシアード大会や
全米選手権大会で
活躍された横山さん

ハヤク
なかでも市口政光さん
アマチュアスポーツ最高峰
東京オリンピック大会で

アン
胸に輝く金メダル
世界に轟く名声は
まさに関西大学体育会
名誉と誇りのレスリングクラブ

ウエカラ
◎ こうして築く伝統と
艱難辛苦の五十年
卒業なされた方々は
己（おの）が地域に根づきつつ
自々（おのおの）事業の発展と
地域社会の指導者と
きちっと果たす責任は

アン
若き時代に養った
責任感と精神力
これぞ関大スピリット

ハヤクチ
未来へはばたくスピリット
いざこれよりも皆様へ
名門関大レスリング
昔の栄光に負けぬよう

やればできるの言葉のとおり
夢と希望を抱きしめ、昇天めざす金龍の
ように
日々の努力と誇りと奮起
今後一層のご発展、皆様方のご活躍
陰からお祈りいたしつつ
皆様のご健康と
あえて変わらぬ御幸福（おしあわせ）
神かけお祈りたてまつり
これにて失礼いたします。



この調子で、各年代の思いを喰いこんで、関西大学レスリング部の半世紀の「歩み」を語り継いでほしい。編集部の願いではある。

さて、その半世紀を、「揺籃期」「第1期黄金時代」「第2期黄金時代」「第3期黄金時代」「大学紛争とは何だったのか」「ひたすらに臥薪嘗胆」「一進一退」「現役諸君に望む」「『未来のビジョン』を」「現状にとどまるな」「創部50周年にむけて」にわけて見つめなおしてきた。そのときどきの顔が浮かんでくる。顔色も見えてくる。眼が語っている。阿吽の呼吸が伝わってくる。悲哀も見える。歓喜も伝わる。奮起も見える。多くを学んだ姿が浮かび上がっている。

この「通史：半世紀のあゆみ」は、とおりにいっぺんのものでしかないかもしれない。だから編集子は、そこに、一人ひとりの関係者の「思い」を培養させて、一人ひとりの「生きた意味」に翻訳しなおしてほしい、と願わざるをえない。長い半世紀だった。苦闘の半世紀だった。栄光の半世紀だった。反省の半世紀だった。そして、すべての関係者にとって、いずれの瞬間も、輝く半世紀だったに相違ない。一人ひとりの「60兆個の全身細胞」でしかと確かめてきた一瞬一瞬の積み重ねが、半世紀を連結する架橋となっていたからではある。

上記の「祝唄」の謂うごとく、すべてから「今

後一層のご発展 皆様方のご活躍 陰からお祈りしつつ見守っていただいている関西大学レスリング部である。現状を打破しての「復活」を当然の最大目標にしなければならない。その自覚はすべてに、あるはずだ。たとえば先に触れている「安田忠典・関西大学第一高等学校・教員就職」問題をもても、わかる。彼は、関係者が期待するこの現状打開策をも内意してくれていて、その方途を自ら申し出ているのである。「自覚」の象徴ではある。しかしながらその戦略の首尾は、期待どおりに運ばなかった。敢えて付言しておこう、「一高内部関係者」も「その他の関係者」も「そして本人自ら」が、この「安田一高就職戦略」に向けて最大努力を心掛けたことは間違いない。だが「一高」の学制改革という内部事情のために、就職戦略として期待していた「ポスト」が一つ減ることになるという不測の力学が働くことになってしまった。この「ポスト減」についても、一高内部関係者が、安田人事に関してその打開策を模索するために、最大努力を試みてくれた。だが4年間を費やした打つ手はすべて駄目だった。ただただ安田忠典に、頭が下がる。彼は、就職という一生を左右する問題を賭けて、関大レスリング部の現状打開のために、考えてくれているのである。いま彼は、関西大学の体育講師として、非常勤のポストに甘んじてくれているものの、いわばこれは腰掛けであって、本就職ではない。「4年」という時間を、「関大レスリング復活」への一活路のために捧げてくれた彼に、感謝しなければなら

ない。やはり半世紀という時間のなかには、いろいろなことがある。そのいろいろな事柄のうち、どれもが重大な意味をなしていることだけは間違いない。その「意味」に、大学スポーツの意義があるのではないか。

ところで日本レスリングは東京五輪時に頂点を迎えている。その頃の日本の社会にも勢いがあった。東京五輪にむけて日本レスリングを引っ張ってきた総帥は故八田一朗だった。日本レスリング協会を会長としてたばねてきた八田の言動は、決して、批判を受けなかったわけでない。だがたしかに、やりぬいた。そしてその八田一朗の思いは、彼の一句に、見事に結晶している。

「狩りの犬・獲物を追って・どこまでも」

秀逸な句作だとは、とても謂えない。だが野暮ったいなかに、キラキラとした、特に現代の若者に備わっていてほしい、意志と精神と意味と希望がある。そこに魅力がある。共感もわく。やる気が湧いてもくる。そして1997年状況の「日本レスリング」は、最悪の沈滞状況にある。「獲物を追って・どこまでも」の意志が、日本の社会から、いつの間にか消失してしまっているようでもある。これは「この国のかたち」の問題ではある。この「通史」をとじるにあたって、八田一朗作のこの一句を、関西大学レスリング部が現在の沈滞を克服するためにも、これからの関大健児たちに、編集子として、捧げておきたい。(完)